

<コラム> さんご礁は大丈夫？

大森 信
阿嘉島臨海研究所所長

Without regard to global warming

M. Omori
E-mail: makomori@amsl.or.jp

温室効果ガスの増加によって温暖化が進むとサンゴの白化現象が起こる頻度が増して、2050年頃には生きていないさんご礁はほとんどなくなるかもしれないと云う。一方で、ここ15年間の世界の平均気温はほぼ横ばいという報告がある。それなら1998年に我々を驚かせた大規模な白化現象はもう起きないのだろうか。

温暖化は炭酸ガスを主とした温室効果ガスの増加がもたらすということをだれもが信じているようだが、それにはまだ懐疑論が少なくない。温室効果ガスの働きを否定する人びとが主張するのは、地球の気温変動に最も影響を及ぼすのは太陽の活動で、その活動が低下すると雲の凝縮核となる宇宙線が増え、雲が増えれば地球は冷える。地球はこれから寒冷化に向かうが、たまたま20世紀後半は太陽活動の上昇と人間活動による温室効果ガスの増加が重なったので、後者の増加が地球温暖化の原因であると考えてしまったというのが主である。そのほか気温を変化させる要因は人為的な温室効果ガスの増加より地球の磁場や水蒸気の変動だという説もある。こうした懐疑論は信憑性が低いものが多いとして反論が用意されていて、おおむね否定されているが、科学の不確実性は完全には払しょくできないから、温暖化の科学的知見を最も包括的に評価したIPCC第4次報告書でも温室効果ガス主因説はvery likelyとの表現にとどまっている。

いろいろな主張をしている科学者やそれに影響されている人たち(それらを利用して助成金を受け取っている研究者を含む)は100年後にはこの世にいないか

ら、地球温暖化が正しかったかどうか分かったときには責任は問われないが、2050年頃には人口が100億人に増え、人間活動が今日のように増大の一途をたどれば、温暖化が起きなくても、さんご礁が衰退してしまうだろうことはかなりの正確さで予想できるだろう。大規模な白化の後でも健全な海のさんご礁は回復が早かったが、汚染が進んだり魚を取り過ぎたりした海では藻類が増えたり病気がでて、さんご礁は元に戻らなかった。人口密集地の近くではオニヒトデが慢性的に発生しているし、際限のない観光開発のせいで、世界中で、空港から数時間で行ける距離にあるさんご礁は、見る影もないほどに疲弊してしまった。地球温暖化に踊らされずに、サンゴとさんご礁の不思議を探求し、優れた生活の仕方や保全の方法を考えて熱帯の国々に広める、そんなさんご礁学であってほしいと思う。

温室効果ガスが地球温暖化の原因にならなくても原発依存は避けたいものである。どんなに安全な発電をしても、そこから出る膨大な量の高レベル放射性廃棄物を減らす技術は今のところない。また、やがて石油や天然ガスは使い尽くされてしまうから、低炭素社会への移行は絶対に必要である。狭い地球で争うことなく生きてゆくために、私たちは人口増加を抑え、人間活動を見直し、原発にも化石燃料にもなるべく頼らない道を今すぐ目指すべきだろう。健全なさんご礁を残すためにも、それが望ましい。八谷まち子氏によって本誌に寄せられたコーベリエル氏の講演記録は示唆に富むものである。